附属中学校総合的な学習の時間におけるコンピテンシー育成のための授業研究
多様性とのであい ～ちがいにリスペクト～

連携研究員 附属中学校教諭　有友愛子

1 背景

附属中学校では、例年第1学年の総合カリキュラム（総合的な学習の時間）の取り組みとして、多様性について考えるプログラムを行っており、2022 年度入学生は「多様性とのであい」をテーマに学習を展開することにした。

多様性を尊重するとは、別の言い方をすれば「お互いのちがいを受け止め合う」ことと捉えることができる。だが、中学生の生活では、大勢のなかで1人だけ違っていると不安を感じたり、反対に見知らぬ人との間に共通点を見つけるとほっとしたりすることもある。「多様性とのであい」の学習では、そうした気持ちを認めたうえで、他者との「ちがい」を尊重することの大切さやその「ちがい」を受け止め合うためにはどうしたらいいのかについて考えさせたい。

2 「多様性とのであい」の授業概要

第1学年の生徒を対象として、2022 年 10 月から 2023 年 2 月にかけて、総合カリキュラムの時間の他、道徳の時間等に実施した。外部団体と連携をしながら、計画的に多様なプログラムを展開した。社会で活躍する講師の先生とのやりとりを通し、新しい価値観や考え方との「であい」について考えることができた。授業の詳細は以下の通りである。本報告では、主に第5回に行った「多様性とのであい～ちがいにリスペクト～」の授業内容について報告する。

	授業名
第1回	ちがいのちがい
第2回	「ちがい」を受け入れあうための「様々な配慮」を見つけよう！
第3回	多様性とのであい ～特別支援学校の先生方から学ぶ～
第4回	ジェンダー平等について考えよう
第5回	多様性とのであい ～ちがいにリスペクト～
第6回	多様性とのであい ～互いの違いを受け止めあえる社会を目指して～
第7回	「伝える」について考えよう
第8回	多様性とのであい ～デフワールドにようこそ！～
第9回	多様性とのであい ～避難所での暮らしをよりよくする工夫～
第 10 回	「多様性とのであい」の振り返り
第 11 回	「多様性とのであい」のまとめ ラウンドテーブル

3 「多様性とのであい～ちがいにリスペクト～」の様子

（1）授業実践の概要

福祉を起点に新たな文化の創造を目指す株式会社ヘラルボニーの方を講師に招き、「ちがいにリスペクト」をテーマにした授業を行った。

前半の講演では、企業・自治体・団体・個人の抱える議題に対して、株式会社ヘラルボニーで取り組んでいる福祉を軸としたアプローチについて教えていただいた。

後半の『未来言語』のワークショップでは、すべての人をつなぐ、未来につながるコミュニケーションについて考えた。グループごとにさまざまなアイデアでコミュニケーションにチャレンジする様子が見られた。

（2）ワークシート

多様性とのであい　～ちがいにリスペクト～

2022.11.18③④校時

１年　組　　番 氏名

「ちがいにリスペクトを。」
仲間ひとりひとりの価値観や意見の違いを認め、
その違いをチームの強みに変えよう。
目標の達成に向かうために積極的に語りあおう。

「異彩を、放て。」をミッションに掲げる福祉実験ユニットヘラルボニーさんは、日本全国の主に知的な障害のある作家や福祉施設と契約を結んでさまざまな取り組みを行っています。
講演では、企業・自治体・団体・個人の抱える課題に対して、福祉を軸としたアプローチについて教えていただきます。『未来言語』のワークショップでは、すべての人をつなぐ、未来につながるコミュニケーションについて考えます。

講師　株式会社ヘラルボニー

スケジュール
集合　12:55　各自アリーナ集合（朝礼隊形）※アリーナ高き
講演　13:00～13:45（45分）
休憩　13:45～13:55　※ワークショップ隊形に移動
ワークショップ　13:55～15:00（65分）　「未来言語」
御礼の挨拶
解礼　15:05～15:15（簡単清掃、特別教室なし）

持ち物
緑カリファイル、筆記用具　※班長・副班長はChromebook持参

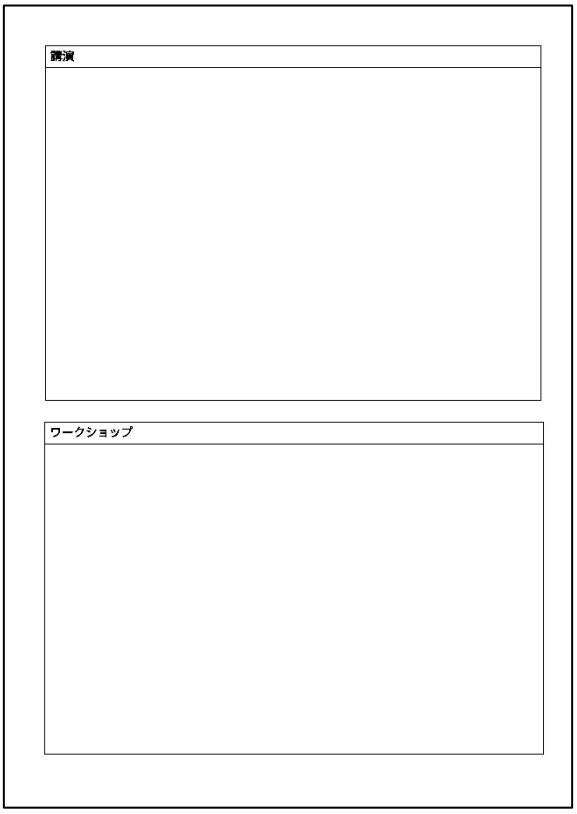
グループ
各クラスの生活班

講演　ステージ　　**ワークショップ**　ステージ

未来言語とは？
もしも「見ない」「聞かない」「話さない」状態でもコミュニケーションができたら、それは未来のコミュニケーションになるのではないだろうか。すべての人がつながる方法になるのではないだろうか。未来言語は、そんな未来のコミュニケーションを創造するプロジェクト。

振り返り
・多様性とのであいOPPシートの記入（11/21（月）朝礼時提出）
・振り返りをフォームで提出（11/21（月）16:00締切）※各クラスのクラスルームを確認

★講義やワークショップで気になったこと、分かったこと、疑問に思ったこと等を裏面に記入し、振り返りに役立てましょう。
★OPPシート、このワークシートは週末持ち帰りましょう。



講演

ワークショップ

（3）生徒の振り返りの様子（一部）

講演

・障害があると給料が、大きく変わったり生活も厳しいということを知った。そのような世の中を変えようとしてできたのがこの会社なんだと知った。商品を見てみるとデザインが素晴らしく、障害者の方に支援することにも繋がるのですごいと思いました。ディズニーや、オリンピック身近なものにも取り入れられていた。今回はじめてこの会社を知ったが新しい未来に向けて取り組んでいる会社なんだと思った。新しいことをすることで次世代にもつながっていくので、相手の立場になって考えたり、どうしたら共生していくことが無理なくできるのかを考えていくことが大事なんだと思った。また障害がある方と常に同じ目線で物事を考えていくことこそが、自分自身の成長にも繋がると思った。

・講演でヘラルボニーさんの人が言っていた障害＝可哀想の概念を変えていくという言葉が印象に残った。なぜなら、今回知的障害のある作家さんが描いたアートを見て、その絵にはその人が描いたからこそある魅力を感じたから。普通じゃないことに価値がついていて、才能を披露して才能となり、すでに出来ているものを伸ばしていくということは知的障害者さんにとっても良い方向であり、その言葉を聞いた私の心も動かされた。今回、講演で聞いた活動は知的障害者さんのアートを披露する場を作ったり、イベントを開催して子供の障害者さんが百貨店に行く機会を作ったりなど知的障害者さんのためになる活動でもあり、工事現場の壁囲いやホテルの部屋にアートを取り入れたり、アートをデータ化して企業に提供したりすることで私たちもアートを身近に感じることができて色々な人のためになる活動だなと思い、私も人の役に立つことをしてみたいと思った。

・私がこの講演で一番驚いたのは知的障害者の方々の多さです。私の身近には知的障害を持っている人がいなかったため、今まであまり触れる機会がなく世界に 2 億人もの知的障害者がいるとは知りませんでした。このお

話を聞いて私自身、気づいていないだけでそのような方々と出会っているのかもしれないなと思いました。また、最初から疑問だった社名の「ヘラルボニー」という言葉は創業者のお兄さんである自閉症の翔太さんが発した言葉であり、一見意味がないとされるものを価値あるものとして魅せていきたいという創業者のお二人の思いがこもっているということにも驚かされました。元々意味がなかったヘラルボニーという言葉に思いを込め、意味を見出して社名にするという発想が素晴らしいなと思いました。あえて、障害のある人を普通ではないと定義してアートを展開させていく、障害者が描いたアートとしてではなく純粋にアートを楽しんでほしいという会社の方針も非常に面白いなと思いました。買った額の一部が作家さんに届くシステムは賃金が安い知的障害者の作家さんのためになる本当に良いシステムだと思うので岩手県に行く機会があればヘラルボニーの自販機で飲み物を買ってみたいと思います。

『未来言語』ワークショップ

・耳や目に不自由があって最初は相手が何を言っているのか全くわからなかったけど、班の中でルールを作っていくうちに少しずつわかってきた。普段の生活がどれだけ言語に依存しているのかがよくわかった。これからは色々なコミュニケーションを生活の中で考えるようにしたい。

・視力・聴力・話力の中でどれか一つでも欠けているものがあると、コミュニケーションを取るのがすごく大変だなと思いました。その中で「何も書いてはいけない」という新ルールが追加されたときは本当にどうすればいいのかわからなくなりました。何もできない人に物事を伝えることはすごく難しく、今自分がこうやって五感を使って生活をすることができていることにすごく幸せを感じました。今の生活を一分一秒噛み締めて生活して行こう、と思うことができました。また、全世界で全ての人が理解することのできる言語ができたら、すごく楽しい世界になりそうだなと考えました。障がい者を障がい者という括りで分けてしまうのではなく、受け入れていくという姿勢がこの世の中には必要になるのではないかなと思いました。

・未来言語ワークショップでは、もしも「見えない」「聞かない」「話さない」状態でもコミュニケーションが取れれるのかという体験をしました。私は最初に「聞こえない」状態のままでもしりとりができるのかを体験しました。耳が聞こえない分、目を使ったり体を使ってワードを伝えることができたので、まだ頑張ればコミュニケーションが取れるという感じでした。次に「見えない」「聞こえない」「話さない」という状態を体験しました。お題は新幹線でした。自分はお題を伝えられる側でした。相手も自分と同じ状況なので伝えるのは難しいということもありますが、手を触られて終わっただけなので握手としか思いませんでした。ですが周りで見ていた友だちによるとたしかに新幹線とわかったようです。これを聞いて、何もできない状態の人と何でもできる状態の人とではかなり差があると感じました。この差をなくして誰もがコミュニケーションが取れるようになればいいとわかりました。私が思う未来言語は手や足を使ったり、皮膚で感じ取ったりすることでコミュニケーションが取れそうだなと思いました。未来ではそんなコミュニケーションが取れればいいなと思いました。

4 考察

「多様性とのであい～ちがいにリスペクト～」の授業を終え、仲間ひとりひとりの価値観や意見の違いを認め、その違いをチームの強みに変えられる仲間づくりにつなげていって欲しいと感じた。さらには、今後生徒が所属する組織においても同様に、仲間ひとりひとりの価値観や意見の違いを認め、その違いをチームの強みに変えられる仲間づくりをリードする存在になって欲しいと願っている。

第 11 回の「多様性とのであい」のまとめ ラウンドテーブルの授業では、Google サイトに整理したこれまでの学びを整理したスライドをもとに、班ごとに意見共有を行った。それぞれの発表から新しい視点を得ることができ、まとめのディスカッションでも、様々な意見が交わされ考えを整理することができた。この授業には、これまで関わってくださった講師の方も多数いらしてくださり生徒の学びを見守ってくださった。

「多様性とのであい」の授業実践での多くのであいや多様な体験から学んだことは、本学が捉える「課題を発見し知識やスキルを状況に応じて組み合わせるなどして、社会の場で成果をあげる包括的能力とその行動特性」というコンピテンシーの定義との関連が見られる実践であった。